

## 聞き書き・新潟水俣病

## 「いっち うんめえ 水らった」

編集：新潟水俣病聞き書き集制作委員会編  
越書房 2003年9月、1500円+税

人生も50を過ぎると、今までを振り返ることが多くなる。他人事だと思い軽視し許容したがためにしばらくして今度はわが身に降りかかることになることに気づかされる。よい例として、雇用形態つまり正社員、派遣、パートによる待遇や権利面での差別を傍観していたことが好き放題のリストラ社会を作り出している。それは公害病の原点といわれる水俣病についても同様であるということを本書を読んで強く感じた。

昭和電工鹿瀬工場（当時）の工場廃水中のメチル水銀が阿賀野川のプランクトン・水生昆虫 川魚 人間の食物連鎖により百万倍に濃縮されることにより水俣病を発症させた。この生態系、食物連鎖という発生のしくみを通して次世代すべてへの影響が危惧されているのが現在深刻な問題となっている環境ホルモンやダイオキシンである。

本書は、1965年の事件公表後31年たった96年に「生きていうちに解決を」という苦汁の決断により一応の決着をみた新潟水俣病の被害者の方たちの今（2001年～2003年）の思いを綴った「聞き書き」の書である。

被害規模は未だ不明で、わかっているだけでも被害者数は約1500人という（209頁）。この内、本書では10名の被害者の生の声が記録されている。その表題を紹介しよう。

「子供に済まなくて」（木村満子さん）

「第一号患者として」（今井一雄さん）

「闘う夫を支えて」（近ヨシさん）

「昭電社員として決意の証言」（江花豊栄さ

ん）

「オヤジをかえせ！」（志田ミツエさん）

「トビの仕事を奪われて」（山田春雄さん）

「欲たかりと違いますいね」（水留信さん）

「船頭できねばマンマの食い上げ」（市川徳太郎さん）

「ほっかむりはやめよう」（小武節子さん）

「子や孫のために」（樋口幸二さん）

かつての阿賀野川の豊かな自然に依存した人々の活発な暮らしがメチル水銀の被害により破壊されていく無念さとともに、心無い差別や偏見に押しつぶされることなく、裁判で国家と昭和電工の責任を問うたその命がけとも言える姿勢に、人間としての尊厳、次世代への思いを感じさせ心が揺さぶられる。

なぜ被害を後世に伝えるのかについて、樋口さんは次のように語っている。「もう水俣病は忘れたいっていう気持ちもね、そりゃわかるよ。でもそれをやっぱりね、もう一步前進して、自分たちの苦しみを後世に伝えて二度とそういうことが起きないように考えたらどうかと、おれは思うね。」（205頁）

メチル水銀を含んだ廃水の垂れ流しは、人々の健康のみならず、地域の生活の軸であった豊かな阿賀野川の自然生態系を将来にわたって破壊し、人々の生活、文化、共同体に大きな被害を与えた。

前述した環境ホルモン、ダイオキシンだけでなく原子力やバイオテクノロジーなどによる公害が危惧される現在、一人ひとりの庶民の命、地域のくらしという視線で、被害を考えることの大切さを本書は教えている。巻末の水俣病に関する解説や年表もわかりやすい。一人でも多くの人に読んでいただきたい。